

## つばさ川柳

### 願法みつる編(第百五十六号)

あつという間の三密と不要不急禁足の一年でした。年金族には程良い経済状態だったのかも知れませんが、バイタリティー横溢な若い世代には、人生観や心身に及ぼしたダメージが大きな時代でした。

否応もなく観るしかないテレビの世界は、有象無象な学者や安価な出演料で駆り出される芸人の訳の分からない日本語を聞かされたり、皺だらけの歌手の演歌番組ばかりで誠に不消化の日日でした。こんな時代こそ、滑稽や諷刺を込めた川柳を吐くトキでしょう。

#### 『自由句』

ロボットで構わないから肩揉んで

佐原 利幸

表向き恵比寿顔でも下向き派

紅葉は遣らずの雨で濡れ落ち葉

末田 洋一

ネットから仕入れた知恵をひけらかす

言い訳がすんなり通りしたり顔

出席を怪しくさせている微熱

ワクチンを打つまで家に引き籠もる

谷井 修平

引き際の態度で決まる潔さ

円満の秘訣は妻とディスタンス

落葉掃くランドゴルフコース用

蜂巣 徹

コロナ討つ新ワクチンの出番待つ

期待され大統領の新世界

新世代巨体C―2音静か

堀内今一步

付き物の怪我で上位の総崩れ

御逝去を賀状辞退で知らされる

任命が当たり前とは驕りなり

若松 靖夫

掛け外しマスク会食遠慮する

妻逝きし長き介護の懐かしさ

お仲間の集い笑顔の散歩道

岡本詔一郎

良い顔を狙う自撮りの四苦八苦

夕焼けが明日の希望を信じさせ

他人様の笑顔へそつとお手伝い

願法みつる

検察も働く振りを少し見せ

蠟燭の長さを今夜気にもする

課題句『取り決め』 願法みつる選

- |                    |       |
|--------------------|-------|
| 取り決めも世情次第で日々変わる    | 蜂巢 徹  |
| 取り決めの不変は時代錯誤なり     | 若松 靖夫 |
| アとウンで済ます二人のお約束     | 岡本詔一郎 |
| 取り決めを忘れて孫に叱られる     | 末田 洋一 |
| 介護する順番決める爺と婆       | 谷井 修平 |
| 青春は約束反故で霧と消え       | 堀内今一步 |
| バツハ来て五輪の譜面書いて行く    | 佐原 利幸 |
| 軸 策ひとつぎりぎりぎりど知恵尽くす | 願法みつる |

名句鑑賞 国民文化祭 最優秀句

国民文化祭は、全日本川柳協会の主催によつて昭和五十六年の第一回東京大会から昨年の第三十四回新潟大会まで、毎年都道府県持ち回りで開催されている。

大会では事前課題と当日課題が示され、参加者数は事前課題では三千名を超え、当日出席者も四百名から九百名に達する。

- |                     |       |
|---------------------|-------|
| 一 スタートの時には見えた虹の空    | 近江あきら |
| 二 白い皿笑顔が透けるまで洗う     | 長谷川博子 |
| 三 日の丸の白地に文字を書くなかれ   | 北藤 七星 |
| 四 窓を拭く私の心拭くように      | 高見 辰二 |
| 五 花あかり人を許して帰る道      | 木原 鶴子 |
| 六 空港に降り立ち大地ありがたし    | 渡辺 義武 |
| 七 断崖の松に男が見た美学       | 多間 哲夫 |
| 八 にぎり飯流れが変わるかも知れぬ   | 政岡日枝子 |
| 九 神の手に返す命を白くする      | 高井 美恵 |
| 十 ことさらに黒髪へ雪降りたがり    | 五百部長洋 |
| 十一 立ち直るチャンスを呉れた平手打ち | 増田 紗弓 |
| 十二 除幕式石がゆっくり呼吸する    | 柴田 爽  |
| 十三 恩をみな返して竹に花が咲く    | 細川 聖夜 |
| 十四 花になり実になり踊り抜く系譜   | 中原 諷人 |
| 十五 実印を押しても和紙は妥協せず   | 京武 悠治 |
| 十六 牛の歩で足りる新世紀は長い    | 定本 広文 |
| 十七 ふる里に戻る敗北感はない     | 小金沢綏子 |
| 十八 子に分けて涸れることなき父のダム | 三輪美智子 |
| 十九 蟹食べる時の私が私です      | 川上 大輪 |
| 二十 温泉へ田を植えて行き刈つて行き  | 西部 郁代 |

- |     |                  |        |
|-----|------------------|--------|
| 二十一 | 九条も土堀も白いまま守る     | 菅野 泰行  |
| 二十二 | 森の絵を飾って森と同化する    | 大石 一粹  |
| 二十三 | 廃絶の核を信じてホタル舞う    | 菱木 誠   |
| 二十四 | お手植えの根っこに埋めてある昭和 | 平田 朝子  |
| 二十五 | 青空へごまかしなどはみせられぬ  | 山内美恵子  |
| 二十六 | 人の道説いて寂しくなっている   | 日野原凡児  |
| 二十七 | 泥んこの軍手で虹をつかまえる   | 大西 貞子  |
| 二十八 | 生きたくて大根つるす紐を編む   | 高瀬 霜石  |
| 二十九 | セシウムの消える日を待つ滑り台  | 齊藤 豊康  |
| 三十  | 津波にも耐えた宿ですごゆっくり  | 柳岡 睦子  |
| 三十一 | 話しかけないで原爆ドームです   | おかの蓉子  |
| 三十二 | 椿守大地へかえる鐘をきく     | 森中恵美子  |
| 三十三 | 一本のペンからにんげんが香る   | たむらあきこ |
| 三十四 | 島あげて医師を波止場で出迎える  | 秋宏まさ道  |

百五十七号の課題は『流れる』。課題句二句と自由句三句をご投稿下さい。締切りは二月末日です。